

基礎をおく地主、又有利なる畑作によつて上昇しようとしながら、自給的生産機構（＝水田経営）を放棄しえない小作農、かかる生産構造からすれば、当然に地主の立脚する経済構造の弱体さをも考慮せねばなるまい。

『局地的市場圏の限介↑↓地主制形成』の大塚理論に立ち、地主制生成発展をブルジョアジーの上昇転化に求めながらも、彼等と支配機構との関連の推移を深く追求しなかつた為に、寄生地主制というものをその本質から遊離させ、單に生ずべくして生じたものとして把握してしまつたことが、ともかくもブルジョアの發展を抽出しようとする態度とともに指摘されよう。

だがかかる実証的研究のみが問題を解決するカギとなりうるものである以上、多くの難点は指摘されようが、両氏の精力的な研究には教示されるが多かつた。それだけに浅学の私たちは誤解の多いことを恐れている。

なお本書を紹介するに當つて第一、二章は寺門、三、四章は根本が分担した。（お茶の水 四五〇円）

卒論紹介（三一年度卒業）

定額寺制の成立について

秋 山 高 志

古代に於いて、國家より保護を得ていた寺院は律令体制衰

退と共に、その衰退変質を余儀なくされる。定額寺の制が、この変質過程に生じたものである事は夙に竹内理三氏の指摘された事であるが、その成立について尙、二三附け加うべき事がある様に思われる。

定額寺の成立時期は七世紀代と九・十世紀代と二期ある。朝廷としてはこの定額寺の制に、七世紀代はほぼ「保護」に、九・十世紀代は「統制」に比重を置いた様である。

光仁、桓武帝は、定額寺以外の私寺の禁、度者の制限等、仏教界振肅に力を尽されたが、天台真言の高僧、有力貴族は禁制を免れる為、私寺を定額寺とされる事を請ひ、やがて定額寺である事を手掛りに、僧侶に取つて種々の特権即ち、年分度者給賜、三会出席権一階業制度、僧位制度に密接な關係あり一師資相承、僧綱管理の排除等の權利を漸次得てゆき、檀越も、安心立命の新しい祈りを、朝廷国分寺に代る役割をこれら定額寺に求めたのであつた。

東北地方における近世大名の成立

——伊達氏の場合——

柳 橋 房 子

封建制の形成、確立のコースには三つの展開過程が考えられる。即ち（一）古代末期の内乱（二）南北朝の内乱（三）戦国時代の諸大名間における抗争であると思う。

一般に辺境地帯といわれている東北地方において、これ等の諸段階がそれぞれ封建形式にどの様な意義を持つていたかという問題を伊達氏の場合について考えてみた。

伊達氏の祖は伊達家譜によると藤原氏の出で、実宗の時常陸介に任ぜられ、常陸国真壁郡伊佐庄中村に住していた。そして専ら武士化の道をたどつたと考えられそれより四代後朝宗の頃にはかなりの勢力をこの地に築いた。文治五年八月頼朝の奥州征伐にあたり、彼はその一族郎党を引見してこれに参加しており、その戦功を認められ、奥州伊達郡を賜つたのである。しかし惣領である朝宗は常陸に本拠を有し、伊達郡は子息の一人に管理させていたと考えられる。当時の東北経営については大体この様な傾向が一般的に認められる。

この様に奥州征伐後の東北地方の情勢は徐々に変化を来たしている事は当然であり、従来この地方は皇室料が多く、莊園が少ない上遠隔地故に領主の圧力も弱く、地頭は容易に一円知行化をなし、次第にこれを足場として強力な惣領制を展開してゆくのであつた。やがて鎌倉幕府滅亡、南北朝の内乱期をむかえる。この期における伊達氏の動静を見ると、惣領行朝は最初より南朝方に属し、建武元年に定められた多賀国府の陣容の中に加わつており、建武二年には恩賞として、奥州高野郡北方を与えられている。この頃は既に伊達氏の本拠は伊達郡に移住している。そして又この期になると惣領判の姿化が認められる様になる、即ち惣領行朝の下に統一的行動を

とらず、それぞれ惣領、庶子間に独立化の傾向がみられることは注意すべきであろう。庶流政長は元弘三年には南朝方についていたが、建歩五年には足利高氏により知行地を与えられており、伊達氏の惣領制は今や古い血縁的紐帯による結合方式から新たに編成替を要求されつつあつたと考えられる。それはとりもなおさず非血縁的な群小領主武士層の家士編成に向けられる。例えば永和二年宗遠は小沢伊賀守、同三年余目参河守と一揆契約を結んでいる。この内乱の意義はいろいろ評価されようが、東北地方にもたらしたものは、惣領制の解体を開く僅かな道と、有力国人層の地域的連合の共同体を生み出し、更にこの地域的封建制が、守護大名領国制への展開を約束してゆくものであつたと考えられる。

室町期に入ると幕府対鎌倉府の抗争激化の中に立ち、東國の有力国人層の動揺の中に、伊達氏は幕府方と通じながらも独自の権力を形成して行くのであり、政宗の頃よりその傾向をみる事が出来るが成宗の頃になると次第にそれがはつきりとあらわれて来ている。例えば長享二年、大崎氏の内訌、明応八年、葛西氏の内訌に介入し、更に留守氏への入嗣が屢々行われている。この様にして近隣諸国人層を引き入れ、領土の拡張も盛んに行われ行朝宗遠政宗の頃は伊達郡以外に出羽長井、信夫、刈田、伊貝、柴田等数郡、植宗の時にはその外安達、名取、宮城郡竹城保等に及んでいる。そして大永二年陸奥守護に任ぜられている。ここに名実共に守護大名の成

立が考えられる。伊達氏の大名化はほぼ植宗によつて整えられ今後の發展への糸口をつくつてゐる。今迄の領主武士Ⅱ國人層に対し司法行政権を持ち得る様になつた。天文二年「藏方之掟」同五年「塵芥集」の一連の分国法の成立によつても考えられよう。又家士制の編成も行われ一四〇數通にのぼる安堵状、充置状をみるによつて充分に究明出来よう。又同時に外的活動としての入嗣策も継続されていることは当然である。

天文十一年より同十七年迄は伊達氏の内訌が生じ奥州の広仁の乱的な大規模な展開をみせるが、この危機も伊達氏も強固にする側に傾いた結果になり、次代政宗により伊達代権力は確立されてゆくのである。

藤田幽谷の經濟思想

——特に勸農或問を中心に——

相澤 雍子

封建制の社会においては、將軍を最高とする身分階級の嚴重な階層制が完成し、その機構を支える基盤は、各藩單位の農業生産に基礎をおく、封鎖的な經濟であつた。しかし、徳川幕府の兵農分離策は、武士の城下町居住をたて前としたから、彼等の消費生活は、貨幣經濟を推進させ、品商生産を促し、更に農村にまで浸透して、封建經濟の基盤を危機に至らし

める結果になつた。ここに十七世紀以降の領主財政の著しい窮乏が目立つてくる。幕府は、この状勢を打解するため、三大改革を行つて、領主經濟の立直しを謀つたが、新しい社會經濟体制のめざましい發展の前には、恒久的な改革とは、なり得なかつた。この様な狀況は、諸藩においても同様にならぬ水戸藩も決して例外ではあり得なかつた。

ともあれ領主財政の立直しを論じた当時の諸學者の政治經濟思想は、三大改革を推進せしめる先驅的な役割を果してゐた意味において重視されねばならない。又その意味において幕府以外の諸藩における諸學者の思想も、当然検討されねばならない。

そこで、偉大なる実行家東湖の數多くの獻策をもとにして推進された水戸藩大保の改革を考えるに當つて、その改革の思想が、既に東湖の父幽谷の幾多の藩主への獻策を通じて論ぜられているという事に注目せざるを得ないのである。

ここにおいて、幽谷の著「勸農或問」に現れた經濟思想を中心に、まず江戸時代の諸學者の經濟思想をみ、幽谷の思想の特色を明らかにし、次いで幽谷のそうした思想の起因となつた寛政期前後の水戸藩における社會經濟状況を究明し、最後に幽谷の思想が、水戸藩大保の改革にどの様に影響しているかをみて、その歴史的意義を明らかにしたのである。

水戸藩に於ける郷校の一研究

石井敏雄

江戸中期以降著しい発達をみせた郷校には藩士の教育を目的としたものと、一般庶民の教育を目的としたものとの二種類に大別されるが、水戸藩に於いて文化年間より安政年間にかけて設立された十五の郷校はすべて直接或は間接に藩主の設立によるものであり、藩校との関係は密接不離であつて、その維持運営は藩費の支出によるのを原則としたが、それに加えて地方住民の協力が大きく、いわば半官半民的な性格を有するものと云える。

この郷校の教育は設立の時期、或は地方によつて各々特色を有してはいたが、諸郷校に共通することは庶民の教育を目的としながらも、文武不岐、学問事業の一致の水戸学の精神が一貫し、教育内容は「文」では初歩的、実用的な儒学を中心として、それに医学を併せ教えたものであつて、その方法は講釈講演等の外に会説輪説等の相互学習が多く行われた。地方「武」では剣や槍術の外に各種の武道が加えられ、特に安政以後は鉄砲射撃等の集団訓練さえ行うものが多くなつた。

次に郷校生徒の身分については、地方在住の郷土村役人等の外に多数の上層農民が含まれており、むしろ郷校の主要な

師教育対象は富裕農民層であつたと考えられる。又郷校の教師には藩士、郷士、儒者、神官が藩の使命によつてこれに当たる外、藩校からも文武の師範が来校し指導に当たつた。故に諸郷校の教育は、藩校弘道館の教育と多くの共通点を有し、一面からは農民を士化する如き結果にさえなつたが、教育の本質に於いて藩校と郷校とは厳然たる差がみられ、遂に一本化することはなかつた。

かゝる郷校教育の成果は多くの点で地方文化の発展に大いに寄与し、更に明治の学制施行に際しては新小学の礎石的な役割を果したのである。

笠間藩における藩政改革

小室昭

笠間藩の藩政改革は、牧野家の七代貞喜就藩中の文化六年（一八〇九）から、次代貞幹の文政六年（一八二三）迄の十五年間に実施されたものである。

先ず、牧野家が笠間に移封してから改革期前迄の政治、経済、社会の状況を見て、改革を必然ならしめた要因を藩体制及び農村社会の実態から検討して見た。前者は藩政の危機の要因を領主側からみた様相を史料的に指摘し、後者では、直接藩体制を動搖せしめた農村社会の実情——農業以外に見るべき産業もなく、又商業による融通の便も少く、その上農業

生産力も低い為に封建制経済の矛盾が最も酷く痛めつけた当領内の諸現象——所謂後進地の性格を如実に現わした百姓一揆、貢納状況及び離村と人口減少等について考察した。

次に改革の性格を見る為、その担い手がどこにあつたかを封建的身分制によつて分析し、それに基づいての改革の展開では、先ず第一に主眼とした農政——本百姓再創出やその維持をはかつた一連の諸政策。貢租体系の強化策。更に農民的商品経済の発展に対応して、それを領主経済に繰入れようとした買占仕法。又对家臣団と藩機構に対する施策——儉政と封建的権威の再建をめざした諸策等を具体的にどの様な形で実施されたかを明らかにした。

最後に改革の実績とその後の変化を史料的制限から概説にみて、明治維新への移行の展望とした。

プセウドクセノフォン

「アテナイ人の国制」をめぐる諸問題

佐々木和夫

本書はその成立年代も著者も詳でない。著者の抽象的非歴史的表现方法は、それに直結するかも知れない史実を次から次へと想い浮ばせ、成立年代に相当の幅を持たせねばならない。著者自身についても、クリティアス、アルキピアデス、フリュニコス、クセノフォン、ツキユデデス等と諸説続

出の状態で、而もそれぞれ反駁の余地を残している有様である。著者が恐らくアテナイ人であることは彼の言葉から容易に想像化されても、いざ何処で書いたかとなると言語的に難しい問題となるし、寡頭派の一員であることは確かだが、その地位とか、追放された者かどうかということになると益々困難である。それは著者が自らを匿名にふせよとの意図にやるものであろう。

本書の史料としての価値はいうまでもなく、反民主的立場の者の民主政体批判の生の姿を吾々に教えてくれるにある。そしてまた、喜劇に対する有名な件は古典劇史の上のみならず言論の問題ともからまつて興味深い問題を提示している。こんなわけで、本書の成立年代と著者自身については現在の研究以上に究明する術もなからうから——身勝手な臆測と思う人がいても、その内容個々の問題と取組む方がより有効であると考へる。

農民層分解を通して見た

第一次綜劃運動について

平野方彦

資本主義社会が成立するためには、一方の極にすぐに資本に転化し得る最低限度の富を保有する富裕な農民層の存在と、生産手段から切り離されて自分の労働以外には売る何物

もなく、したがつて自由な労働者に転化し得る土地なき貧民層の存在とが前提されていなければならぬ。そして前者が農業資本家として出現し、後者の労働力を再び緑割地の中で結合することが資本制生産成立の基礎過程である。ところでこれら二階層は封建社会における支配的な生産者たる農民層の中から自己分解して出て来たものであり、この農民層の分解は緑割運動によつて促進され、決定的なものとされたのである。緑割運動は地方によつて相当の差異は認められるとしても、経営の近代化による大経営への指向を示す領主型緑割と、経営の合理化、就中耕作改良の方向を指向する農民型緑割とが二つの類型として考えられるが、両者ともブルジョアの発展を指向するものであつた。小論はこれら二つの型の緑割を対比しつつ農民層の分解に焦点を合せて、資本主義社会の出発点を追求せんとしたものである。

レッシングの啓蒙思想

大内礼子

レッシングの生きた時代は、ドイツの言つてゐるよう
に、「ドイツの全教養が神学的であつた時代」であり、英・
仏の啓蒙思想の影響をうけた当時のドイツの自覚的人間が新
しい方向へ進もうとすれば、必然的に神学——宗教を理性の
対立の克服の問題——と対決しなければならなかつたが、こ

れがとりもなおさずドイツの啓蒙思想に課せられた任務であつた。

レッシングの晩年の一連の神学上の著作は、この問題を正面から取り組んでいるが、就中死の前年にあらわした「人類の教育 Die Erziehung des Menschengeschlechts. 1780」は、彼の神学思想の総決算ともいふべきものである。この論文を中心にして、前述の観点からレッシングの啓蒙思想に若干考察を加えてみた。

レッシングは宗教に対し、一種の歴史的考察法を行つてゐるのであるが、そこにみられる「理性の発展」の思想は、單に神学理論にのみ適用されてゐるのではなく、彼の社会観を構成するものとなつていて、これが彼の思想に進歩性と共に、英・仏の啓蒙思想の如き社会改革の理念にまで徹底しえない理論的必然性を与えてゐると考えられるが、ヴァインデルバントはこの点について、レッシングは「発展」の思想をたゞ宗教にのみ適用したという見解をとつてゐる。

一八三〇年代初期における

イギリス労働者の動き

——建築工組合を中心に——

涌井英四郎

労働者大衆を主力とし、中産階級を指導者とする一大国民

運動として展開された議会改革運動は、三二年六月に労働者大衆の勝利感を以つて終りを遂げたが、勝利の成果は何一つ彼等のものとはならなかつた。彼等は中産階級のこの裏切りに大いに憤り、政治運動に幻滅を感じて経済斗争によつて自分達の地位を高めんとした。その決意の貫徹の最初にして最強の媒介物となつたのが建築工組合であつた。この組合はあらゆる労働者達に対して大きな希望と勇気を与えると同時に、ロバート・オーウエンに対しては、新しい希望の委託者として現われることによつて、ます／＼その組織を大かつ、強固に行つて、ついには発足数週にして百万のメンバーを獲得したと言われる、グランド・ナショナル Grand National Consolidated Trades Union への高まりを結果するのである。小論ではこのような役割を果たした当時の建築工組合の歴史を、ポストゲート氏の研究に依拠しつつ自分なりにあつづけたものである。

— 執筆者紹介 —

島田雄次郎	本学文理学部教授
瀬谷義彦	茨城工業短期大学教授
豊崎卓	本学文理学部助教
飯田瑞穂	東京大学大学院学生
涌井英四郎	水戸商業高校教
みやべまさゆき	石岡一高教諭
花田久	手賀中学校教諭
寺門守男	本学教育学部学生
根本茂	本学文理学部学生